京都府立大学学術報告（公共政策）第 11 号　(2019 年 12 月)

ヒューズ社会学における解釈的制度生態学の射程

― シカゴ学派と相互作用論の再評価をめぐって ―

野　田　浩　資

1．はじめに

1990 年代半ば以降，シカゴ学派社会学の再評価が本格化し，現在も進行中である。1920 年代にアメリカ社会学の主流を占めた「初期シカゴ学派」から第二次大戦後の「第二次シカゴ学派」へと知的系譜をたどり，その再評価を進める営みが，アメリカ本国だけでなく国際的に広がっている [*1]。本稿では，シカゴ学派第三世代の主要人物であり，「第二次シカゴ学派」への「シカゴ学派社会学」の継承において大きな役割を果たしたヒューズ（Everett C. Hughes）をとりあげ，シカゴ学派社会学および相互作用論の再評価を背景とするヒューズ自身の再評価について検討をおこなう [*2]。

以下，2 節では，再評価の背景として，ヒューズの経歴とヒューズ評価の 2 つの像を紹介し，ヒューズ社会学の位置を示す。3 節では，ヒューズの理論家としての側面を評価し，ヒューズの準拠枠として提示されている「解釈的制度生態学」(interpretive institutional ecology）について紹介，検討する。4 節では，「解釈的制度生態学」という準拠枠の理論的意義，可能性と課題について検討する。

---

*1　1990 年代以降のシカゴ学派再評価の主なものとして，Bulmer（1994），Fine ed.（1995），Tomasi ed.（1998），Abbott（1999），Low and Bowden eds.（2013）などがある。日本では，宝月・中野編（1997），中野・宝月編（2003），宝月・吉原編（2004），宝月（2010）などがある。

*2　本稿は，近年のシカゴ学派および相互作用論の再評価をめぐる動向を整理するものであるとともに，野田（1990），野田（1991），野田（1997），野田（2001），野田（2003），野田（2005），野田（2006）の続編として，近年の議論の動向を踏まえて，ヒューズを中心として，シカゴ学派，相互作用論について再評価を進めようとするものである。

2．シカゴ学派再評価とヒューズ社会学の位置

2.1. ヒューズの経歴と再評価の背景

シカゴ学派と相互作用論の再評価と連動して，ヒューズの再評価が進行中である。ここでは，シカゴ学派の再評価を背景として，ヒューズの再評価の方向性についてまとめておこう。

シカゴ学派は，アメリカにおいて初めて社会学の学科が設置されたシカゴ大学において，1920～30 年代にパークを中心に都市社会学，人間生態学を発展させ，シカゴ・モノグラフと呼ばれる多くの経験的研究でも知られる。ヒューズは，1897 年にオハイオ州で生まれ，シカゴ大学大学院に進学し，シカゴ学派社会学の創設者パークの下で学び，カナダのマクギル大学に赴任，その後，シカゴ大学に戻り，第二次大戦後，「第二次シカゴ学派」の中心となるベッカー，ゴフマンらの学生を指導するとともに，社会学科長と『アメリカ社会学雑誌』（American Journal of Sociology）の編集を務めた。シカゴ大学を去った後も，ブランダイス大学とボストン大学でも学生を指導し，1963 年にはアメリカ社会学会会長を務め，1983 年に 85 才の生涯を終えた[*3]。

当時のアメリカ社会学の中心であったシカゴ大学で，パークの下で学び，その後，「シカゴ学派の伝統」を後続の世代に伝えたのがヒューズであった。一方，従来の社会学の学説史において，第二次大戦後は，アメリカ社会学における主流の位置が，シカゴ大学からハーバード大学，コロンビア大学へと移行した時代として描かれることが多い。パーソンズ，マートンらを中心とする「構造－機能主義」が展開され，統計的手法による実証的研究としての「量的調査」が発展し，社会学の主流を形成することになる。その意味で，ヒューズは，シカゴ大学が，アメリカ社会学の主流の地位を失いつつある時期に,「質的調査」を中心とする「シカゴ学派の伝統」を支え，その継承に努めたことになる。

1990 年代以降，シカゴ学派再評価への取り組みの中で，従来のイメージには修正が加えられつつある。シカゴ大学自体が,「質的調査」一辺倒であったわけではなく,「統計派」のスタッフを加え，内部構成は複合化していたこと，また，何より当時シカゴ大学（のヒューズのもと）で教育を受けた学生たちが，その後,「第二次シカゴ学派」と評価される活躍をしたことである（Bulmer，1994；Fine ed.，1995；Abbott，1999）。フィールド調査を中心とする業績を残しながら,「シカゴ学派の伝統」の継承に大きな役割を果たしたのがヒューズであった[*4]。

2.2. 2つのヒューズ像――「エッセイスト」か「理論家」か？

ヒューズ再評価の中で，ヒューズには,「エッセイスト」と「理論家」という 2 つの像が示されている（Helmes-Hayes & Marco Santoro eds.，2016）。シャプリ（Chapoulie，1996）が「エッ

*3　ヒューズの経歴については，Coser（1994）によるヒューズ論文集への序文を参照。日本語の文献としては，内田（2003），内田（2007）において，詳しく紹介，検討されている。

*4　野田（2001），野田（2003）において，ヒューズの社会調査法の特徴を整理し，ヒューズによってフィールドワークの調査法とその教育法の制度化が進められたことを評価している。

セイスト」と評価し，ヘルメス＝ヘイズ（Helmes-Hayes，2010）が「理論家」と対照的な評価をおこなっている。ただし，「エッセイスト」としての評価も，ヒューズが影響を受けているジンメルに対応したものであり，また，「理論家」としてヒューズを評価するとしても，ヒューズが，パーソンズやブルーマーと同じような意味での「理論家」ではないことが保留されており，２つの像は矛盾するものではないといえよう[*5]。

ヒューズ自身が，優れた社会学的感性と文章表現力を持っていたことは，明らかである。一方，体系的なかたちでの理論的著作は残されていない。ヒューズは，アメリカ社会学へのジンメルの紹介者のひとりでもあり，ジンメル流の「古風」なスタイルに連なっている（それは，パークからの伝統でもあり，ヒューズの学生であったベッカーやゴフマンへのジンメルの影響にもつながっている）。ヒューズは，パークとバージェスが編集し，表紙の色から『グリーンバイブル』と称された『科学としての社会学入門』（Park & Burges eds.，1921）を教科書として学んだ世代である。『グリーンバイブル』を基礎的な理論的枠組みとして携えて，現場での調査に向かい，成果を上げた世代であり，自らが理論的著作を残そうという意識は小さかったことが推測される。

ヒューズ評価は揺れ動いている段階であるが，現時点でのヒューズ評価の論点をまとめておこう。

第１に，シカゴ学派第三世代の重要人物であることを評価の出発点とすることは確かであろう。師であるパークを継承し，理論的に発展させ，第二次大戦後，シカゴ大学においての多くの優秀な学生たちを教育し，「偉大な教師」（ベッカーの表現）としての側面は高く評価されている。

第２に，相互作用論者として位置づけについての議論がある。シンボリック相互作用論は「ブルーマーによって理論的に，ヒューズ（とヒューズの学生たち）によって実証的に形作られた」という評価が典型的なものであろう（Dennis & Smith，2013）。ブルーマーとヒューズを，並列的に扱うことによって，シンボリック相互作用論が描かれている。ただし，次の点とも関わるが，ヒューズ自身は，ゴフマンと同様に，「シンボリック相互作用論」者としての自らへのラベルを拒否していたことが知られており，位置づけを難しくしている（Winkin，1988 = 1999）。

第３に，ヒューズの学生であったゴフマンによる「ヒューズ派社会学」（Hughesian Sociology）の創始者としての評価がある（Helmes-Hayes & Santoro eds.，2016：10-15）。ゴフマンは，自身を「ヒューズ派都市エスノグラファー」と表現しており，ヒューズが独自のスタイルを築き，後の世代に伝え得たという位置づけにつながる。ヒューズによる『転換期のフランス系カナダ』というモノグラフを例とすれば，そのテーマは，人種・民族関係だけではなく，近代化，都市化，産業化，また，権力関係や階級構造の変化に広がっている。また，調査方法としては，質的調査法にこだわらず，統計データの利用を含めて，多様な手法を駆使して調査を実施している。この２点の広がりが「ヒューズ派」に対する人類学からの影響，人類学との共通性を大きく見る評価につながる。エスノグラフィーという手法そのものが，人類学と共通のものであり，

*5　２つのヒューズ像については，内田（2003）が詳しく，紹介，検討している。内田は，「エッセイスト」「理論家」という２つの像を両立させる二重性を「デュアル・ビジョンの社会学」として評価している。

ヒューズは，応用人類学会の会長も務めており，シカゴ大学では，人類学者のレッドフィールドやウォーナーらが同世代の同僚であり，後年には，同時代のアメリカ社会を描いた『孤独な群衆』で知られるリースマンもまたヒューズの同僚であった。これらの人々との交流が，ヒューズ（派）社会学の視野の広さにつながっていると思われる。また，ヒューズは，自ら（と学生たち）による職業研究を，「アメリカ民族学」として位置づけており，人種・民族関係，職業と専門職化，そこから展開した医療社会学，そして，ベッカーやゴフマンらの世代によってそれぞれに展開されていったことになる。

3つの論点を紹介したが，先行するパークからの影響，ヒューズによる展開，そして，学生たちの世代による継承，発展を，それぞれ評価し，より詳細に検討していくことが必要であり，本稿はその試みの1つである。

3．解釈的制度生態学

3.1．準拠枠としての解釈的制度生態学

本節では，ヒューズに対して「理論家」としての評価を進めているヘルメス＝ヘイズが，ヒューズが発展させた準拠枠として提示している「解釈的制度生態学」についての検討をおこなう（Helmes-Hayes，1998；2010；Helmes-Hayes & Santoro eds.，2016）。

「解釈的制度生態学」は，ヒューズ自身による表現ではなく，ヘルメス＝ヘイズによる表現である（Heles-Hayes, 1998：217-218）。ヘルメス＝ヘイズの意図は，ヒューズに対する「シンボリック相互作用論者」というラベルを避けることであった。ヘルメス＝ヘイズは，ヒューズの「理論家」としての評価を進める立場から，その準拠枠がシンボリック相互作用論というカテゴリーに当てはまらないことを示すために「解釈的制度生態学」と表現している。

ヘルメス＝ヘイズは，ヒューズは，古典的なシカゴ社会学の基盤的要素（生態学、広義のフィールドワーク、個人および文化による対象や出来事への解釈的関心）と人類学的機能主義およびジンメル流の形式社会学の選択的要素を結合させることによって，発達させたと位置づけている。ただし，ヘルメス＝ヘイズは，「解釈的制度生態学」について明示的な定義を行っているわけではなく，ヒューズの研究（特に，後述するように初期のモノグラフ）を参照，例示しながら，その特徴を列挙するかたちで，「解釈的制度生態学」を説明している。以下に，その概要をまとめてみよう。

第1に，ヒューズの「解釈的制度生態学」は人間生態学を基盤とすることである。ヒューズの師であり，シカゴ学派社会学の創始者であるパークは「人間生態学」を提唱し，ヒューズは，そのもとで『科学としての社会学入門』を教科書として育った世代である。しかしながら，ヒューズは，パークやバージェスによって定式化された「人間生態学」をそのまま採用することはしなかった。パークの世代から何を受け継ぎ，何を発展させたかが問われることになる。

第2に，「制度」を分析の単位とすることである。ヘルメス＝ヘイズは，ヒューズによる「制度」の用法，概念化に注目し，「構造面」と「解釈面」の両面から検討している。「制度」という

用語が，デュアリスティック（二元的／二重的）な用法によって，「客観的実在」であることと，解釈をおこなう主体によって個人的，集合的に決定されていく「解釈的」プロセスとしての２つの側面から概念化されていることを指摘している。「構造」面では，ヒューズは，「制度」をフォーマルに設立された実体（法人，企業など）として定義し，「解釈」面では，「制度」は，人々に対し影響を与え，また，人々が「制度」を作り出し，一方，「制度」は，社会に対して機能的であるという生態学的，人類学的な説明がおこなわれていることが指摘されている。

第３に，ヒューズの「解釈的制度生態学」がミクロとマクロの両方の要素の構造と過程を対象としていることが指摘され，ヘルメス＝ヘイズは，３つのレベル，ミクロ，マクロ，メゾ・レベルの重層的なアプローチであることを，肯定的に評価している。

第４に，ヒューズの調査対象へのアプローチが，マルチメソッドであることが指摘されている。フィールドワークを中心として，インタビューや観察などの質的調査法を，また，統計の利用など量的調査法を，折衷的であれ，多様な手法を駆使して対象へアプローチしていることを肯定的に評価している。

以上のように，ヘルメス＝ヘイズは，ヒューズの準拠枠としての「解釈的制度生態学」について，その特徴を列挙し，説明しているが，より具体的に，どのように「準拠枠」が社会的現実に適用されているのか，次節では，「解釈的制度生態学」が，どのように「社会的現実」「社会生活」と対応づけられるか，ヒューズのモノグラフから検討していこう。

3.2.『シカゴ不動産協会』における解釈的制度生態学

「解釈的制度生態学」が，ヒューズの著作においてどのように準拠枠となっているか，より具体的に検討していく。『制度体の成長――シカゴ不動産協会』（The Growth of an Institution: The Chicago Real Estate Board）は，ヒューズの学位研究であり，「シカゴ・モノグラフ」の１冊として出版されたものである[*6]。

背景として，アメリカにおける「リアルター」（Realtor）と呼ばれる専門職としての不動産業者の地位について説明しておこう。アメリカにおける不動産ブローカー資格は，医師，弁護士と並んで三大資格とされており，「リアルター」は，専門職（プロフェッション）としての高い地位を確保している。「リアルター」資格の取得には厳しいハードルがあり，倫理綱領の遵守が求められ，違反者には資格停止などの厳しい処分が下される。医師や弁護士に，それぞれの協会（医師会，弁護士会）があり，それぞれが厳しい資格審査と倫理綱領を備え，高い倫理性と団体としての公益性が期待されていることと同様である。この「リアルター」という資格を作り出し，「全米不動産協会」の中心となって組織化を進めたのが「シカゴ不動産協会」であった。約 120 万人の会員が所属するアメリカ有数の業界団体であるが，現在でも，「全米不動産協会」の本部はシ

*6　野田（1997），野田（2003）において，『シカゴ不動産協会』の紹介と検討を行っている。本稿では，「解釈的制度生態学」という準拠枠との対応関係を検討することを目的としているためであるが，内容を簡略化して示している。

カゴに置かれているが，アメリカ有数の政治力を有している業界団体とされている。

ヒューズのモノグラフは，地位の低い職業が，同業者の団体を組織化し，先行する専門職をモデルとして，業界全体の地位向上を進めた成長の物語である。ヒューズが調査した時点で既に，「全米不動産協会」が設立されており，現前する「制度」の調査であるとともに，比較的近い過去に関する歴史的な研究としての側面をもつ。

そのことがヒューズの原著の題名「The Growth of an Institution」に表れている。単一の制度を対象とした調査研究であることが明示されており，シカゴに設立された１つの組織が，全米規模の巨大な組織へと成長していく物語なのである。本稿では，単一の「制度」を対象としていることが明らかな場合に，「制度体」という訳語を用いている。

『シカゴ不動産協会』という制度体の物語を「解釈的制度生態学」という準拠枠に対応させて説明を試みていこう。序論部では，「制度体」「制度」についての検討が行われている。ヒューズは，サムナーに依拠し，「制度」は「概念」と「構造」を構成要素としていると定義している。「構造」は，「特定の局面において共同するように配置された職務分担者（functionaries）」である。この定義を，「解釈的制度生態学」という準拠枠に当てはめて検討してみよう。「制度」「制度体」が，構造面と解釈面をもつことに対応している。すなわち，「制度体」は，それぞれに職務を分担しているメンバー「構造」と，その「制度体」の「概念」（「意味」や「定義」）を構成要素としている。また，「制度体」は，その環境であるコミュニティと，「概念」「意味」を通して，すなわち，後述するようにコミュニティに対して「役割」を引き受け，それを果たすことを通じて，自らの地位向上を図っていくという「解釈」過程を伴った相互作用を行う中で，コミュニティへの適応と生き残りを図るものとして，概念化されている [*7]。

「制度体」は，社会運動が成長，発展したものと捉えることができ，宗教的動機や世俗的なの利益を出発点とし，その発達過程において，それを取り巻く環境であるコミュニティに対して，一定の「役割」を果たすことによって，組織の拡大・成長し，環境へ適応していくという生態学的，また，機能的な説明と接合されている。逆にいえば，「役割」を引き受けることができない場合には，「制度」は，停滞・縮小し，滅んでいくという生態学的環境における合理的選択という考え方が前提となっているともいえよう。

本論の前半部の各章では，協会の「構造」に相当する，協会の内部と外部のメンバーがとりあげられる。会員が守るべき「規約」（code）が定められ，会員は，標準化された業務内容を守り，一方，会員内部では，情報が交換され，新しいメンバーへの教育がなされるようになる。「リアルター」という称号が定められ，組織外の業者に対する排除と差別化が進められる。会員資格は，大規模な業者を排除するために医師や弁護士と同様に，個人単位の加入とされた。会費などの条

*7　コミュニティは，人間生態学によって対象とされている生態学的環境であり，具体的には，主にシカゴ市を意味している。ソサイエティとしての「社会」（society）とは区別するためコミュニティを訳語としている。また，『シカゴ不動産協会』においては，「概念」の原語は，「concept」ではなく，「conception」が用いられている。野田（1990），野田（1991）を参照。

件を操作することによって，排除，吸収が図られる。協会に属さない業者の姿が紹介され，大規模な企業や，小規模な逸脱的な業者について説明されることで，「制度体」の内部と外部のメンバーの協会が示されることになる。前半部全体として，「規約」の制定，共有化，また，その操作・修正によってメンバーを制御するという解釈過程が描かれている。

本論の後半部の各章では，「シカゴ不動産協会」が，コミュニティに対してどのような「役割」を引き受けていくことになったかがたどられる。協会は，「地主の保護者」「納税者の番犬」「不動産業者の保護者」「土地の流通者」として，コミュニティに対して，一定の役割を引き受け，それを果たし，コミュニティに条例制定などの「政策」（policy）を要求していくことになる。地主や納税者の利益の代弁者として，優良な住宅を建築するための「住宅条例」の制定や，公園や大通りの整備，また，「ゾーニング」を伴う都市計画の制定を進めたのがシカゴ不動産協会なのである。

モノグラフの全体は，さまざまな解釈過程による「制御」の拡大の過程として描かれている。「規約」を定めることによって，内部のメンバーを直接的に制御し，以前は競争者であった同業者どうしを互いの競争から保護するとともに，「規約」は，メンバーと外部の境界を定め，制御することになる。また，内部的な「規約」は，外部社会への「政策」に接合され，社会に対して一定の「役割」を果たすことを通じてクライアントや公衆との友好的な関係を保ち，専門職としての権限の確保と地位の向上を達成してきたのである。不動産協会は，土地と不動産に関する「価値観」を支配し，生活の一つの領域における「定義」を下す権限の獲得に至る。これは，「医」の領域における医師，「法」の領域における法律家の位置に相当する。

以上のように，『シカゴ不動産協会』において，「定義」「規約」「役割」「政策」などの用語によって示されているように，多様な主体間の解釈過程と相互作用過程を通じて，「制度体」が，コミュニティにおける生存競争のなかで生き残っていくという「生態学的」な物語として描かれているのである。以上の検討によって，現在からみれば整序された枠組みではなかったが，「解釈的制度生態学」という準拠枠の意義は一定程度示されたと思われる。

4．考察

4.1. 解釈的制度生態学の検証

ヘルメス＝ヘイズの表現には，矛盾，混乱が含まれている。「解釈」「制度」と「生態学」という理論的には，結びつきにくい要素を１つの表現の中におさめている。ある種の矛盾，混乱を含んでいるがゆえに魅力的な表現ともなっているが，その内容については慎重な検討が必要であろう。ヘルメス＝ヘイズの主張は，ヒューズを発掘し，再評価することが主な目的となっており，基本的に肯定的に評価することとなっている。本稿の立場も共通のものであるが，今後の研究の展開を図る意味から，慎重に課題の指摘と検討を試みたい。

第１の論点は，ヘルメス＝ヘイズによるヒューズの評価が，ヒューズの研究の初期のモノグラフ（『シカゴ不動産協会』と『転換期のフランス系カナダ』）を中心的な検討材料としていること

である。ヒューズの研究の後期，すなわち，1950 年代以降の職業研究を含めて，ヒューズ社会学の全体に当てはまるかどうかは慎重な検討が必要である。

第 2 の論点は，「制度」を基本的な分析単位とすることによって，ヒューズの視点に，デュアリティ（二元性／二重性），および，「ミクロ／メゾ／マクロ」の重層性が備わっているという肯定的評価である。この点については，ヒューズの準拠枠が社会現象の水準間の視点の移動をどのように可能としているのか，より慎重な検討が必要となろう。

第 3 の論点は，社会調査法におけるマルチメソッドと結びつけられていることである。この点については，準拠枠としての側面と社会調査法としての側面を分けて議論すべきであると指摘しておこう。準拠枠としての「解釈的制度生態学」は，フィールド調査を要請し，多様な手法を組み合わせつつ対象にアプローチすることにつながるものではあるが，両者の関係は，必然とはいえないであろう。

以上の 3 点が，ヘルメス＝ヘイズによるヒューズ評価に対する主要な論点であるが，前節と関連して，もう 1 点，指摘しておきたい。ヒューズ自身のモノグラフは，「制度体」が「制度」へと成長していく物語であった。時代背景を含めて慎重に検討しておく必要があると思われる。パークやヒューズの時代は，アメリカ資本主義の形成途上の時期であり，国家とそれが備える諸制度が形成されていく時期であったといえよう。単数の「制度体」から複数形の「制度」「制度群」への移行は，「一回性の事実としての歴史」的な現象であり，アメリカ的な現象であったともいえよう。ヨーロッパとは異なり，小規模な団体（＝「制度体」）が提唱したルールが，アメリカという国全体に広がり，「制度」そのものが発生し，成長してきたことを感じることができた時代，その意味で，単数形の「制度体」が成長し，社会全体を覆いつくすような「制度」「制度群」，そして，「社会システム」を形成していくという歴史的な移行期であったと考えられる。ヒューズ理論の形成が，時代背景に影響を受けていることを視野に入れて，評価を進める必要があると考えられる。

4.2. ヒューズ社会学の応用可能性と今後の課題

ヘルメス＝ヘイズは，次のように評価している。「もしヒューズの成功と彼の学生たちの成功から判断できるとすれば，解釈的制度生態学が有効な準拠枠であったこと，あり続けていることは，はっきりしている」（Helmes-Hayes，1998：246）。ヒューズの学生たちの世代において，職業研究や専門職論，また，組織研究において，有効な調査研究の枠組みであったことが示されている。また，現代社会においても，「解釈的制度生態学」を「制度体の成長物語」として限定的に適用するという条件であれば，応用可能性を発揮できる研究枠組みであると思われる。ただし，ヒューズの「制度」論の「二元性／二重性」に関する評価は，「構造化論」による理論的動向と方向性を同じくしながらも，「制度」概念に関する再評価も含めて，その射程の慎重な検討を進めていく必要があろう。

それぞれの「理論体系」や「準拠枠」は，構造論と過程論，理論と調査手法，実践を，それぞ

れに独特なスタイルで結びつけている。「シカゴ学派の伝統」として期待されるスタイルを，継承し，後の世代に伝達するという役割を担ったのが，ヒューズであった。その「伝統」は，現在では社会学の一部となり，社会学そのものに溶け込んでしまっており，現時点での評価を難しくしてしまっているともいえよう。今後も，パークからヒューズへの継承，ヒューズによる展開，また，ヒューズの学生たちによる継承と発展，それぞれを再評価，再解釈していく必要があるであろう。

【Everett C. Hughes の主要著作】

1931　The Growth of an Institution: The Chicago Real Estate Board, The University of Chicago Press（=1979, Arno Press).

1943　French Canada in Transition，The University of Chicago Press.

1952　Where Peoples Meet: Racial and Ethnic Frontiers（with Helen MacGill Hughes)，The Free Press.

1958　Men and Their Work，The Free Press.

1961　Boys in White: Student Culture in Medical School（with Howard S. Becker，Blanche Geer，Anselm Strauss)，The University of Chicago Press.

1968　Institutions and the Person (edited by Howard S. Becker，Blanche Geer, David Riesman, Robert Weiss)，Aldine.

1971　The Sociological Eye，Transaction Books.

1994　Everett Hughes on Work, Race and the Sociological Imagination（edited by Lewis A. Coser)，The University of Chicago Press.

【参考文献】

Abbott，Andrew，1999，Department and Discipline：Chicago Sociology at One Hundred, The University of Chicago Press.（= 2011，松本康・任雪飛訳『社会科学と社会学――シカゴ学派百年の真相』ハーベスト社.）

Bulmer，Martin，1994，The Chicago School of Sociology，The University of Chicago Press.

Chapoulie，Jean-Michel，1996，"Everett Hughes and the Chicago School Tradition", Sociological Theory 14(1)：3-29（= Helmes-Hayes & Santoro eds.，2016：39-69.）.

Dennis，Alex, Rob Philburn and Greg Smith eds.，2013，Sociologies of Interaction，Polity Press.

Fine，Gary Alan ed.，1995，A Second Chicago School ？：The Development of a Postwar American Sociology, The University of Chicago Press.

Helmes-Hayes，Rick，1998，"The Sociology of 'Going Concerns'：Everett Hughes' Interpretive

Institutional Ecology", Tomasi ed.：217-249.

Helmes-Hayes, Rick, 2010, "Studying "Going Concerns"：Everett C. Hughes on Method", Sociologica 2：1-27.（= Helmes-Hayes & Santoro eds., 2016：71-91.）

Helmes-Hayes, Rick & Marco Santoro eds. , 2016, The Anthem Companion to Everett Hughes, Anthem Press.

宝月誠・中野正大編, 1997,『シカゴ社会学の研究』恒星社厚生閣.

宝月誠・吉原直樹編, 2004,『初期シカゴ学派の世界――思想・モノグラフ・社会的背景』恒星社厚生閣

宝月誠, 2010,「シカゴ学派社会学の理論的視点」『立命館産業社会論集』45(3)：45-65.

Low, Jacqeline and Gary Bowden eds., 2013, The Chicago School Diaspora：Epistemology and Substance, McGill Queens' University Press.

中野正大・宝月誠編, 2003,『シカゴ学派の社会学』世界思想社.

野田浩資, 1990,「ヒューズ職業社会学におけるマクロ・シンボリック相互作用論」『ソシオロジ』35(1)：53-69.

野田浩資, 1991,「相互作用論の重層性――キャリア・自然史・レトリック」『ソシオロジ』36(2)：21-36.

野田浩資, 1997,「〈プロフェッションの社会学〉の原型：Ｅ・Ｃ・ヒューズ『制度体の成長――シカゴ不動産協会』」寶月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究』恒星社厚生閣：383-406.

野田浩資, 2001,「エヴェレット・ヒューズの調査論とフィールドワークの制度化――初期シカゴ学派から第二次シカゴ学派へ」シカゴ社会学研究会・中野正大編『シカゴ学派の総合的研究』(科学研究費補助金研究成果報告書)：187-197.

野田浩資, 2003,「ヒューズによる『シカゴ学派の伝統』の継承と伝達」中野正大･寶月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社：268-278.

野田浩資, 2005,「職業遂行と不確実性のコントロール：ヒューズ専門職論の現代的可能性」宝月誠・進藤雄三編『社会的コントロールの現在』世界思想社：366-380.

野田浩資, 2006,「ヒューズ専門職論の成立：Men and Their Work(1958) の再検討」シカゴ社会学研究会・中野正大編『現代社会におけるシカゴ学派社会学の応用可能性』(科学研究費補助金研究成果報告書)：99-106.

Park, Robert & Ernest Burgess, 1921, Intrduction to the Science of Sociology, The University of Chicago Press.

Tomasi, Luigi ed., 1998, The Tradition of the Chicago School of Sociology, Ashgate Publishing.

内田健, 2003,「デュアル・ヴィジョンの社会学――エヴァレット・ヒューズとの対話のために」『新潟大学教育人間科学部紀要　人文・社会科学編』6(1)：57-75.

内田健, 2007,「かれの流儀――エヴァレット・ヒューズとの対話（１）」『新潟大学教育人間科

学部紀要　人文・社会科学編』9(2)：277-289.
Winkin, Yve, 1988, Erving Goffman：Les Moments et Leurs Hommes, Seuil/Minuit.（=1989, 石黒毅訳『アーヴィング・ゴッフマン』せりか書房.）

（2019 年 9 月 30 日受理）

（のだ　ひろし　京都府立大学公共政策学部教授）